

柳沢公民館 柳沢1-15-1 ☎042-464-8211 kouminkan@city.nishitokyo.lg.jp
田無公民館 南町5-6-11 ☎042-461-1170 tana-kou@city.nishitokyo.lg.jp
芝久保公民館 芝久保町5-4-48 ☎042-461-9825 shiba-kou@city.nishitokyo.lg.jp

谷戸公民館 谷戸町1-17-2 ☎042-421-3855 yato-kou@city.nishitokyo.lg.jp
ひばりが丘公民館 ひばりが丘2-3-4 ☎042-424-3011 hibari-kou@city.nishitokyo.lg.jp
保谷駅前公民館 東町3-14-30 ☎042-421-1125 ekimae-kou@city.nishitokyo.lg.jp

地域、結び直す「子ども食堂」

みんなで楽しく温かいご飯を食べる地域の居場所、「子ども食堂」。子どもたちに無料で食事を提供する、この市民の活動が、今、西東京市で広がりをを見せています。きっかけは、田無公民館の講座でした。市内在住で、講座の講師を務めた赤石千衣子さん（しんべるまざあず・ふおーらむ理事長）にお話を伺いました。

子どもの貧困が問うもの ひとり親家庭の現状から

「子ども食堂」は、経済的な理由から十分な食事を摂ることができなかつたり、親が忙しすぎてひとりで食事をしたりする子どもに対する支援として始まりました。現在、日本では、子どもの6人に1人は相対的貧困（注）の状況にあります。特にひとり親家庭の子どもの場合、2人に1人は貧困状況にあります。子どもの貧困は、子どもが育つ世帯の貧困の問題であり、親たちの貧困問題です。ひとり親家庭が貧困状況にあるのは就労収入が低いために世帯収入が低いから。にもかかわらず、十分な社会保障が届いていないからです。

日本では、高度経済成長期に、長時間労働する夫と無業あるいは家事補助的に働いて家事育児介護をすべて引き受ける妻、子どもという家族を標準モデルとする男性稼ぎ主システムができあがり、男性には安定的雇用と妻を扶養できる賃金が保障されてきました。OECD（経済協力開発機構）の資料によると、子育てをしている男女の賃金格差は男性を100とすると女性は39で、格差は先進国の中で最大です（2012年）。賃金格差は、ひとり親家庭の中でも特に男性稼ぎ主に頼れないシングルマザーの生活を直撃します。

市民の活動が支えるもの

今、全国的に広がっている子ども食堂はとても貴重な取り組みだと思っています。しかし、行政が、子ども食堂の支援をええしていれば子どもの貧困対策になるという認識を持つのは間違いです。行政による子ども食堂への支援は、場所の提供などに留まっていた方がいい。ブームだからかもしれないが、子ども食堂には農家の方が作物を提供してくれるなど、さまざまな地域の支援がどんどん入ってきています。そういった市民の自主的なものでまかなっている



（注）「相対的貧困」
収入から税金や社会保険料などを差し引いた可処分所得を世帯員数の平方根で割った値である等価可処分所得が、全人口の中央値の半分より低い場合を指します。



性の化することは、公的な支援に
つながれないでいる方の、ある
種の生存を守っていくのかなと
思います。
子ども食堂は、さまざまな可
能性を秘めています。
子どものことは何でも家族が
しなくてはならないという社会
の中で、何か困ったことがあつ
た時に頼れたり、訴えたりでき
る親以外の大人とのつながりを
持つことが、子どもにとって大
切なことだと思っています。同時に
孤立している高齢者や引きこも
りがちな方の居場所にもなつて
いて、子ども食堂が意図してい
なかつた、地域の中の結び直し
のような機能も持っていると思
います。フォーマルな組織では
ないので、困っている人がいた
場合に受け入れやすい。「近所
にあまり食事を摂れていないお
年寄りがいる」といった話が実
際に寄せられている子ども食堂
もあるようです。運営している
方たち自身もみんながそれぞれ
事情を抱えている中で、ちょつ
とずつ力を貸すことで、自分自
身の問題もどこかで共有できる。
子ども食堂にはそういった機能
が含まれていると感じています。
今回、公民館主催講座がきつ
かんで、こういった多機能な地
域のつながりを内包しうるよう
な支援が盛り上がっていったこ
とは、誇っているのではないかと
思いますね。私も所属団体の
「ひとり親家庭のサポーター養
成講座」を行っています。ど
うしてこのようになっていくの
かとか、相談・支援をしていく
とはどういふことなのかなど少
しずつ学びながら、つながりを
作っていくのがいいのではない
かと思っています。

市内にひろがる子ども食堂 ～きっかけは公民館～

田無公民館では、平成26、27年度に、社会問題講座「子どもの貧困に向きあう地域をつくる」[同パート2]を実施しました。学ぶ中で自分に何ができるかを考え合った26年度の受講者は、講座終了後、サークル「西東京わいわいネット」を立ち上げ、27、28年度の同公民館主催事業（子ども食堂「わいわいクッキング」）に協力しています。

公民館が把握しているところでは、現在、市内には子ども食堂が5カ所あり、それぞれの方法で子どもたちを受け入れています。自分を受け入れてくれるおばさんやおじさんと出会う子どもたちにとっての居場所は、地域の中に新しいつながりを生み出しています。

<p>① わいわいクッキング 田無公民館 地下実習室 (南町5-6-11)</p>	<p>② 木々子ども食堂 コミュニティーレストラン木々 (保谷町6-25-1) 042-425-6800</p>
<p>③ 放課後キッチン・ごろごろ(H・K・G) ほっとハウスみどり (緑町2-20-8) 042-466-3323</p>	<p>④ ねんりん子ども食堂 サポートハウス年輪 (田無町5-4-8第一和光ビル1F) 042-466-2216</p>

※芝久保町には、「しばくぼーの」があります。

写真で見るといまむかし
保谷工場

保谷工場(昭和35～41年ごろ)
西東京市中央図書館地域・行政資料室所蔵

現在の下保谷2丁目

昭和16(1941)年、保谷町下保谷(現西東京市下保谷)で「東洋光学硝子製造所」として創業。その後、何回かの変更を経て、昭和35年、商号が「保谷硝子」になりました。現在はHONYA株式会社。保谷工場の敷地は、昭和41年に売却されました。